　　　証太の受難

　丸裸にされて横たわっている証太の肉体は痛みも快感もなかった。細かく波立って形になる意識もないその脳の芯には「負けないぞ」という意志だけがあった。

身体が少しずつ冷えるにつれて意識が戻る。

「神様は生きていらっしゃる」

窮地の底で証太は望みを捨てなかった。間もなく麻薬が切れて禁断症状の時が来る。

あの苦しみにもう一度耐えきる力があるか。

「主が側にいらっしゃる限り」負けることはない。その苦しみに備えよう、と思うそばから体が小刻みに震える。まだその時ではない。その時に備えて、覚悟しようとしているだけなのに「もうこのざまだ」

「苦しいの。かわいそうね」嘲りながら見下ろしている女のおぼろげな姿。

「何故こんなことを」と、何回繰り返して問うたことだろうか。いつも帰ってくる言葉は嘲りばかり。

女の名は「るい」。珍しい名だが、親にとっては何か特別な想いがあって付けたのだろう。そういえばこの店の前に「パブ『るい』」という看板が出ていた。この辺りを縄張りにしている川中組と関係があるのだろうか。

　川中組は父親の代に小さな土建屋を創め、この町出身の代議士の口利きで河川の護岸や道路建設の仕事に手をを広げ、今は県議会議員である。

　川中組の二代目は、取巻きに煽てられてやくざ気取りで嫌われ者になっているが、父親はまだ人望がある。

父親の七光りで川中組には警察も甘いのではないか、と評判になっていたのである。

るいが街中でたちの悪い男たちに絡まれていたのを証太が助けたのがきっかけで、付きまとうようになった。今にして思えばその男たちも組の連中だろう。

　手首と足首を粘着テープで縛って、動きのとれない体を撫でまわし、果ては舐めまわし、「そろそろ楽にしてあげるわね」と猫なで声でるいはささやく。

証太は、「いっそ殺してくれればいいのに」と思い、また、「主が共にいらっしゃる」「主は耐えきれないほどの試練はお与えにならない」「負けないぞ」と思い直す。

　女が注射器を取り出し、震えるだけで動くこともできない証太の腕に近付けて、

「どう、早くして欲しい」と焦らす。

　禁断症状の苦しみに耐えるよりも、麻薬を注射された時の快感に、己を失わないように耐える方が難しい。

「もう逃げられないわよ。完全な『麻薬中毒』、麻薬なしでは生きられないわ」という女の嘲りに、証太は唇を咬むばかりだ。唇が切れて血の臭が口の中に広がった。

　麻薬が注射され、血液が泡立ち、サァーッと体中を駆け巡り、何もかも忘れさせて陶酔させる。惨めさを忘れて快感にしびれる。

その快感の中で「川の流れる音」を聞いた。ここは大川の縁だったと思い当たる。大川のこの辺は深い所である。

証太は魚になる。大川を自由自在に泳ぎ回る。

思考は幻想に流される。思考は沈み、幻想は止めどなく広がる。

　騙されて何かを飲まされ、逃げられないようにと、下着まで脱がされた。

「服も下着も袋に入れてゴミで出したわ」と笑う女に、

「何故。どうして」と訊ねても女はにんまりと笑うだけであった。あれからどのくらい経ったのだろうか。

　陶酔、高揚から少しさめて、でも何も考えられる状態ではない。

「ぼんやりしている方が楽だ」気だるい快感の中で、

「今逃げなければ、ますます体力を失い死を待つだけだ」叱咤する自分との格闘が始まる。

「祈れ！　祈れ！　私が川の音を聞かせてやったのになぜ祈らないのか！　」主の御声が脳に響く。

　証太は、「お祈りします。お祈りします」と呟いたが祈りの言葉が出てこない。先日の日曜礼拝で説教の聖句を思い出した。

『詩篇二三篇四節～六節』

「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、わたしのこうべに油をそそがれる。わたしの杯はあふれます。わたしの生きているかぎりは必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう」アーメン。

「あのお説教は今日の受難のために予め主が選んでくださった御言葉に違いない」と、安堵の胸をなでおろした。

少し体が冷えてきた。ようやく理性が勝って、逃走することを考える。女は安心しきっているようだ。

表は朝まで人通りの絶えない歓楽街だ。川中組の縄張りの中から、鈍ってしまった感覚でしかも裸、裸足だ。逃げられるはずがない。

覚悟を決める時だった。女が眠ってから川までの距離がどれほどか見よう。寝返りもままならないほどの無力感が不安である。

　もう幾日経ったのだろうか。こんな女の所に男の客がある。それも一人ではない。一人が帰れば間もなくまた別の男が来る。川中組の男たちである。

　今は昼なのか、夜なのか。たぶん夜だろう。

　女の寝息が聞こえる。証太は、仰向けから腹這いになるのさえ苦しかった。肘で這って窓際に寄り、厚いカーテンをめくって大川と自分の位置を見定めた。元気な時ならばこの窓から飛べば十分に届く距離である。もし川まで届かなければ大怪我は避けられない。

今はほかに活路がない。人一倍鍛えた体である。自分を信じ主の御加護を信じ、決行するしかない。

　手首のテープを口にくわえ少しずつ解く。手が自由になりさえすれば足首は楽に解ける。「しっかりしろ」自分自身を叱咤しながら、のろのろと、窓をあけて敷居に立った。

「主よ！　」力一杯叫びながら証太は飛んだ。足から先に水に沈む。危うく水を飲みそうになると、

「汚いぞ。こんな水を飲むな。今にきれいな水が腹いっぱい飲める」と声が聞こえる。

「急げ、急いで夜が明ける前にこの川を下って支流に入ってしまわなければ」とかせる。

　この声はどうやら自分の声である。この幾日かの間、肉体は麻薬の快感に酔いしれているか、そうでない時は禁断症状に苦しんでいたが、窮地に陥った自分の魂が身体の苦痛を超えて逃げ道を探していたのだ。そして今疲れきった身体を励ましているのである。

　大川の流れの速い所へ泳ぎ入って後は流れに身を任せていた。流木の端が水面近くまで突き出ていたり、危険は無数にあった。その中を夜中に怪我もなく五キロほど流れ下って支流の川に入ることができた。神鳥川は去年証太が建てた丸太小屋を建てた山に通じる谷川である。その頃になって夜が明けた。

崖のはるか上を通る道からこの川を、夜が明けて間もない今頃の時間にのぞいてみる人もいなかろうが、この姿を人には見られたくない。はだしの足から血を流しながら石だらけの狭い河原を歩いた。まだ麻薬が抜けていないのだろうか、爪先からも足の裏からも血を流しながら、ほとんど痛みを感じなかった。

　この川を二キロほど上り、さらに支流の谷川を三〇〇メートルほど遡った所に、証太が去年買って丸太小屋を建てた山がある。そこまで行けば乾パンと雨具の上着とズボン、それに登山靴くらいはある。

　なんとか、あの丸太小屋まで、人に見られないで行き着きたい、というのが証太の想いだった。

　どうやら人に見られず、自分の小屋に行き着いた。証太は信じた。「奇跡に違いない」と。

　証太が買った山には、滝のような細い流れがあるので、そのきれいな水を飲み、小屋に入った。ともあれ雨具を着て、非常用に買っておいた乾パンを食べ、イタドリの太めの芽を選んで採って皮を剥いて食べ、ようやく落ち着いた。

大川の流れに乗って泳いだのが六時間近い。谷川の縁を歩いたのがおよそ一時間くらいだったか。麻薬による気だるさも、もう始まっているはずの禁断症状も感じなかった。あまりにも異常な状況の中で、麻薬が効かなくなってしまったのだろうか。

　その日は一日中小屋で寝た。夢の中で証太は山から山へ谷を飛び越え、見えるはずのない遠くまでを見ることができた。証太は自分の体が飛び回っているのではなく、動いているのは彼の魂であることを知っていた。

　体を離れて飛び回る魂。証太にはそれが夢ではなかったことがずっと後になって分かった。

夜中になって六キロばかり離れた町のスーパーまで歩いて行った。国道に面した店はとっくに閉店して、自動販売機だけが明々と明かりをつけていた。

　証太は十数台もの自動販売機の釣銭の出口や、辺りの地面を見て歩いたが、十円銅貨一枚も見つからなかった。グリーンの公衆電話が目の前にあるのに、助けを呼ぶことができない。がっかりしながらその公衆電話を覗くと、何と、先客が取り忘れた百円銀貨があった。

「神様！　この銀貨をください。百倍にして献金いたします。百倍でも少ない、千倍の十万円を献金いたします。お許しください」と祈りながら美津子に電話した。

　美津子は田波社長の一人娘だ。証太はまだ高校生の頃、この田波自動車修理工場でアルバイトをしていた。機械の修理・改善や老人のための補助具の開発などが自分の天職、と思って機械や工具の使い方を覚えるためにこの会社で働かせてもらっていたので、ほかの社員とは心構えが違ったのである。

そこを見込まれて社長から、

「後継ぎにならないか」と声をかけられたのにも「考えていることがありますので」と断ったので、美津子に膨れられたことがあった。あれから十年以上の歳月が経っている。今では証太は社長の希望通り「後継ぎ」になるつもりである。

　村に帰って父親の手伝いをするよりも、自動車の販売、修理、農機具や重機の修理、販売も手掛ける株式会社田波にいる方が村のためにも、父への応援にも役立つことに気が付いのだった。

大学院を卒業してから一度は父母のもとへ帰ったのに、また出て来て株式会社田波に入社して、独身寮に入れてもらい、営業の仕事に就いたのだった。

　美津子も十年の間に笑顔のきれいな人になっていた。

　今年の五月、美津子の誕生祝いに招待された証太は、社長の気持ちも分かっていたので、両親の許しを得て誕生日の祝いに婚約指輪を持って行って驚かせたのだった。

　あの女「るい」から、「父親のＤＶでひどい目に会っている。助けて」と言われて困り果てた。

美津子に相談すると、

「るいさんの事で良くない噂を聞いています。ＤＶは個人の力では及ばないので、弁護士を中心にしたＮＰＯ法人があって活動しています。新聞社に友人がいるので照会してもらいましょう」と知恵を貸してくれた。

　その時は美津子の知恵でＮＰＯ法人に任せてそれで済んだと思ったのに、幾日も経たないうちに、あの店の前でるいに遭ったのだった。

　事情を話したい、説明したい、と絡む女に、「その必要はない」と突き放しても、るいは大きな声で、「聞いてよー。ちょっとでいいから私の言うことを聞いてよー」と泣き騒ぎ、野次馬の人垣ができる始末につい負けて店に入った。

　カウンターの向こうに回ったその女を見て初めてそういう仕事をしているのか、と思ったのだった。

　カウンターに並べたグラスに水を注いで、煽るように飲んだ女に釣られて、自分に勧められたグラスからほんの一口、水のつもりで飲んだのが何だったのか、苦いような、酸いような、変だと思った時には喉を通っていた。

「こんなものを飲ませたのか。死んでしまうぞ」

人の話し声が、薄れてゆく意識の中で遠く聞こえた。

　美津子に連絡できた。美津子はここまで来てくれるという。

証太は、

「タイヤの太いオフロード用のバイクで来て欲しい。今、雨具の上着とズボンと登山靴しか身に付ける物がない、着る物と、現金と、銀行のキャッシュカードを僕の部屋から持って来て」と頼んだ。証太の独身寮の鍵は株式会社田波の事務所にもある。こんなことを予期していたわけではないが好都合だった。

　美津子にとっては証太が住むようになって初めて入った寮の部屋で、着る物やら現金、カードなどを探すのはひと仕事であった。

　証太の待っているスーパーまでは一〇キロほどだったので、電話を受けてから一時間後にはその駐車場へ入った。

　証太は姿を見せず少し離れた物陰に美津子を呼んで、一緒に身をめた。

いぶかる美津子に、

「けられているかもしれない」証太がく。

　間もなく二台のバイクが美津子の止めたバイクの側に停った。

「何処にいる。出てこい」彼らは身を隠そうともしない。

　証太が歩み寄ると一人が腰のベルトから引き抜いた警棒を一振りしていっぱいに伸ばすと、大きくを振りかぶって打ちかかる。証太は身を反らせるようにして手首を蹴り上げる。

　重い登山靴で手首をしたたかに蹴られて、警棒は大きく弧を描いて飛び、男は手首を抱えて座り込む。もう一人の方はもう闘志がないようだ。

　証太は美津子の乗ってきたバイクの後ろに美津子を乗せて、二〇キロほど離れた東武線の駅近くまで行き、公園のベンチで自分が遭遇した災難を詳しく語った。

　ここに着いた時には星が見えていたのに、もう始発の電車が来そうだ。

「警察へ届を出しましょう」と言う美津子に証太は川中組が絡む事件で警察がいかに頼りないかを話した。

「でも、他にどうしたらいいのかしら」と考え込む美津子に証太は、美津子の知り合いの新聞記者に、証太が麻薬を注射されたことを話してほしいと頼んだ。

　田舎の小さな警察署では麻薬捜査専従の部署もないだろう。

「『麻薬取締官』は厚生省の管轄で、新聞記事になることは少ないが、警察には許されない捜査方法も許されるし、彼らは決して買収されないから、きっと奴らを検挙してくれる。僕は難を避けているだけでいいんだよ。

この街の警察のだらしなさは誰でも知っている。麻薬取締官も、もう目をつけているだろう。僕を追いかけて人も無げな騒ぎをしていれば、麻薬取締官にとってもチャンスになるだろう。

『一日逃げ切れば一日の勝ち』僕はただ逃げるだけだ。復讐は神様にお任せすればいい」

　美津子を説得して始発の電車で帰した。

　美津子が持ってきてくれた現金は四・五日の逃避行には十分だったが、川中組の出方を探るために、駅近くで証太が口座を持っている銀行の支店で一万円だけ引き出して銀行が見える公園で見張っていた。

　一時間ほど経ったとき、一目で筋者と分かる五人の男たちの乗ったバイクが銀行の前で一旦止まり、それぞれに町の中に散って行った。

　やはり、銀行にまで手配が及んでいる。警官が一枚噛んでいるのか、直接銀行に圧力をかけて通報させたのか、どっちにしろ敵の力は大きい。

　走り回る五台のバイクのけたたましい爆音は、この小さな町の中の隅々から聞こえてくる。間もなく五台のバイクは銀行の前に集り、元来た方へ帰って行った。それを見て証太は「陽動作戦だ」と気が付きぞっとした。

公園の刈りこんだ木の陰から、背の高い引き締まった体躯を黒革のジャンバー、ズボンに包んだ、黒豹を連想させる。しなやかな脚運びの男が来る。

只者ではない。証太はいきなり走りだした。公園の垣を飛び越え近くの山へ向かって畑を横切り藪をくぐって山に入る。真直ぐ尾根に向かって走る。

この辺りは丸太小屋を建てるための山を探していた時に歩き回ったのでよく知っている。尾根を越えた向こうの斜面は日当たりの悪い所で、蛇がうじゃうじゃいる。都会から来た男を迎え撃つには、湿った斜面の足場の悪い所が良い。証太は平気だがその男にとっては動きにくいからだ。

　しばらくは追いつかれそうだったが、相手は革靴、証太は登山靴、山の中では勝手が違う。距離が開いた。証太は周りを見ながら余裕を持って走っていた。

いた！　蝮だ。証太が振り返ると、男はまた距離を縮めて来ている。証太は蝮を飛び越えてから振り向きシュートを決めるように蝮を蹴った。男は真正面に飛んで来た蝮を警棒で払ったが、蝮は警棒から手首にかけてからみついた。絡みついた蝮にはもう咬みつく力はない。

蝮は、蹴飛ばされて払われた警棒に物理的に巻き付いたに過ぎないが、都会から来た助っ人にはそれが分からない。慌てて警棒を放し蝮を振り払う。証太はその蝮の尾を掴んで鞭を使うようにして男の額を打った。

　男は驚愕して額に手を当てると手に血が付いていた。

「蝮の血だよ。蛇でも血が出るんだよ。あんたにはどうだ、赤い血が通っているのか。あんたの雇い主は麻薬を扱っている。そのことを承知で請け負ったのか」

友人にでも話すように話しかける証太に男は、

「麻薬。それは知らなかった。知っていれば請けなかった。念を押したのに、手を染めていないと言った」

「これが証拠だよ。三日間閉じ込められて、この通りさ」と、腕をまくって注射の後を見せる。

「『るい』って店を知ってるか。あの二階でだよ」

「契約違反だから仕事は中止する。で、俺をどうする」

「どうかするつもりなら、こんな話はしないさ」

「そうか、すまない。知り合いの刑事に話しとくよ」

「そうしてもらえればありがたい」

　蝮を見つけた時、証太にはそこに蝮がいることが分かっていた。自分の目で見る前から分かっていたのであった。彼はそれを不思議とも思っていなかった。

男は帰って行った。証太に取っては命がけの闘争も男にとってはビジネスにすぎないのだ。警察で「暴行傷害」を訴えても、被害届を受け付けるだけで、相手の住所氏名などが分からなければ、被害者の怪我がよほどの重症でない限り捜査もしてもらえない。しかし、麻薬が絡めばそれでは済まないのである。

　証太の親友、上原剛は彼らが通った大学のある隣の市で警官になっている。

証太が電話で事情を話すと、

「俺の出身地だが、あの町の警察はたるんでいる。知り合いの警官がたくさんいるから、おたおたしていれば『麻取』が動くぞ、と発破をかけてやる」と息巻いた。「麻取」とは、麻薬取締官のことらしい。

証太は銀行へ電話した。

「一志証太ですが、おたくでは顧客がどこの支店で現金を引き出したか、何処かの誰かに報告するのですか。現金を下ろしたら、カッキリ一時間後に五人の怖い若い衆がバイクで来て、町中の人を怖がらせて帰りましたよ。そのほかにもっと怖い人が来て、その人にも帰ってもらいました。麻薬を扱うような『組』と親密に取引していると、もうじき新聞に銀行の名前が大きく出ますよ」

銀行員に一方的に話をして電話を切った。

　人の口に戸は立てられない。すぐに噂が広がるだろう。

証太は、るいに取り上げられたスマホの代わりを買った。新しいスマホで美津子に電話して、友人の電話番号やメールアドレスを聞いた。三人ばかりしか分からなかったが、それで十分だった。

　証太から話を聞いた友人がの銀行で、

「口座を解約してください。顧客の情報を、麻薬を扱うような会社に通報する銀行とは、お付き合いしたくないので」と言ったので、銀行員は言い訳のしようもなく解約に応じた。

　証太が高校を卒業した町である。友人は多い。友人の間を情報が飛び交って、ぼつぼつそういう客が来る。銀行はパニック状態である。

　応接室に案内して応対しようとしても、証太の友人としてはここで粘り、ほかの人にも聞いてもらうのが狙いだから応じるわけがない。

　川中組のことには慎重で「組長に電話で注意する」くらいのことしかしてこなかった市警察幹部も「麻薬」という言葉に動揺した。

　日ごろ暴力や脅しの報告をしても、上司に抑えられて事件にもならないので現場の警察官も不満で、先に「麻取」が手を入れたら我々のメンツはどうなるか、と突き上げが激しい。

　地元の地方紙も、記事にしても掲載させてもらえなかったり、自社の幹部が川中組の幹部とゴルフだの慶弔時や歓送迎会に同席しているのを見て、不快に思っている者も多い。

今度の件をだれがリークしたのか記者たちは一斉に、

「今度こそ記事にしてやる。思い切り書いて日ごろの鬱憤を晴らしてやる」と、取材を始めた。

「もう警察も、新聞も止めようがないだろう。市警幹部にも良いお灸になるだろう」と剛から証太のスマホに電話があった。

　証太は、もう会社の寮に帰ってもいいかと思ったが、剛は、

「親戚の温泉旅館を紹介するからゆっくりして来い」と言う。

田波社長夫妻にも美津子にも電話で話すと、

「ゆっくりしていらっしゃい」と言う。

　証太は剛の紹介してくれた温泉旅館で、その夜と次の日いっぱい温泉に入っては寝て、すっかり疲れを癒して夕方帰った。

　寮の自分の部屋に帰る前に田波邸へ寄ると、心配した友人が十人も集まっていた。

　田波夫妻には美津子に危険な使いを頼んだことを詫びなければならなかった。

　美津子の母が、

「私たちに電話してくれれば、屈強な男たちに頼んで行ってもらったのに……」と、小言を言いかけると美津子の父田波社長は、

「いや、美津子が私たちに話すこともできたんだ。それをしないで自分で出かけて行ったのは、どんな災難も二人で引き受けていこうという、かたい決心と勇気があったからだ。私は褒めてやりたい。無事に済んだから言えることだが」と言う。

　証太は言葉が出なかった。絨毯に手をつき、頭を下げようとすると、

「そんなことをするな」と、社長が証太の手をとってソファーに座らせてくれた。

「ともあれ無事を祝って乾杯」と言うことになった。話がはずんでいるうちに、

「それにしてもあの女、一級下でも同じ中学に通って、よく知った仲じゃないか。どうしてそんなことができたのかな」と、疑問を口にした友人がいたので証太は、

「おなじ中学の一級下？　覚えていない！　」

　皆が驚いて証太を見た。証太は脇の下に汗がにじむのを感じた。

「そうなのよこの人は、十年もの間私を無視したの。

この人は手にスパナーを握って生まれた人で、機械いじり以外には興味のない人なの。

私、許せないと思ったけど、一生かけて償ってくれるというから結婚することにしたのよ。

証太さん。るいさんのこと、ほんとに覚えていなかったの。ルイさんにとって絶対許せないようなことを言ったんじゃないの。事件の原因はあなたの言葉か態度だったんじゃないの」

証太は今年の四月、美津子がリクルートルックの若い男と立ち話をしているところに通りかかった。証太は美津子がその男に見せた笑顔を見て「こんなに素晴らしい人だったのか」と思ったのであった。

　矢も楯もたまらないで、すぐその日の夕方美津子を誘って、川沿いの道を歩きながら求婚したのだった。

「いつも見向きもしなかったのに急にどうしたの」

といぶかる美津子に証太は、

「今日美津子さんが若い人と話しているのを見て『しまった』と思った。俺は今までなにをしていたのか、と思った。あなたを無視していたことは、一生かけて必ず償います。これからの生涯を共にしてください。美津子さん。あなたしかいない」

告白して美津子に、

「一生かけて償ってくださるのね。それなら良いわ」

と泣き笑いしながら承知してもらったのだった。

　るいはもう逮捕され、取り調べを受けているという。

　剛に付添ってもらってすぐに警察署へ行った。

　六時過ぎだったが、この街では大きな事件だったので、警察官は昼間同様に大勢でわらわら働いていた。

「一志証太です」と名乗ると、すぐに所長の前に連れて行かれた。被害者として事情聴取に、剛が立会いを希望すると、麻薬を使用していると、情報をいち早く入れてくれた剛を無視できなかったし、差支えないということで、広い会議室に通された。

　何人もの警察官に取り囲まれるような形で事情を聞かれた。

証太は、

「自分にも原因があるように思う。直接話を聞きたいのでるいさんに会わせてください」と頼み込んだが初めは応じてもらえなかった。

　詳しく事情を話して改めて、るいとの面会を頼みこむと、逮捕してから一言も口を利かない、るいを警察では持てあましていたので、警察官立会いで許可されることになった。

　取り調べ室にはもう、るいが連れて来られていた。

「二人で自由に話してよろしい。ただし、すべて録画、録音され、ここで話したことは証拠として取り上げられることがある。また警察官の質問と同じで、話したくないことは黙秘することができる」と告げられた。

「るいさん。あんた中学の一年後輩だったんだね。ごめん。全然気が付かなかった」

　るいは初めて顔を上げて証太をにらんだ。凄まじい怒りに満ちた、喰い付きそうな形相だった。

「美津子にも言われた。『私は十年もの間透明人間だったの』って、一言もなかったよ。一生かけて償いをするから、と謝って婚約してもらったよ」

「あんたの顔を思い切りひっぱたかせてよ」

「ここは警察だぞ。警官の見ている所でそんなことをしたらますます罪が重くなるだろう」

「じゃあ美津子にここへ来てもらってよ」

「どうするの」

「『毎日、朝起きたら、証太が一時間瞬きしないで美津子を見つめること』って、結婚に条件をつけさせる」

「無茶言うなよ。一時間も瞬きしないでいられるかい」

「バカ！　ほんとに私のこと、思い出せないの」

しばらく考えて、るいが諦めかけたころ、

「うーん。ちょっと待ってよ。声だ。声を聞いたことがある。ウーン……。チルチル、ミチル。そうだ、学芸会の劇『青い鳥』だった。君はミチルをやった

　皆少しずつセリフを間違えたり、出遅れたりしたが、君のミチルだけは完璧だった。僕はあの劇の台本をプリントしてもらって完全に暗記していたから、間違いが気になってね、それで覚えている。ナレーションなんか本を見ながらなのに読み違えたり、タイミングを外したりして君のミチルがかわいそうだった。、君だけが完璧だった。演技も抜群だったね」

「もういいわよ。あんたはお世辞も嘘も言えない人だから。もういいわよ。警察にもこれ以上逆らわないわよ」と言いながらるいは声を上げて泣きだしてしまった。

　帰り道、証太は剛と肩を並べて歩きながら、人を無視するということはどういうことだろうか。それもこれほど完全に意識の外に閉め出して、知らない間に人を傷つけてしまった。僕の人格に何か決定的な欠陥があるのだろうか、と考え込んでいた。

　だが、どうして彼女の執着の相手が自分だったのか。証太には理解できなかった。

「美津子さんも、るいも。女の執念は怖いなぁ。それにしてもその相手がどうしてノビ太なんだ。俺なら分かるが」と冗談めかして剛が言う。中学時代に、証太にノビ太とニックネームをつけたのは剛、剛にジャイアンとニックネームをつけたのは証太である。

「ノビ太よ。深刻になり過ぎるな」剛らしい忠告である。

「言葉に出たことだけが全部じゃない。他に複雑な事情があるはずだ。

たとえば戸籍上の両親が実の親ではない。実の父は川中県議会議員。母親は芸妓だそうだ。芸妓といっても、耳の肥えた特別な客にだけ、姿を見せず屏風の陰で三味線を弾いて聞かせるという、名妓と言われるほどの芸達者だということだ。

それを聞いただけでも複雑そうなことは分かる。それだけでもなさそうだし。とにかく取り調べに対して素直になったことだけでも心証が良くなる。来た甲斐があったというものさ」

証太がまだ考え込んでいるのを剛は、

「こういう事件というのはな、一つの原因で起きるわけじゃない。報道される『事件の真相』なんて、たくさん積み重なって最後にぶち切れてしまった『その時の事』に過ぎないんだよ。

今度の事だって、あんな場所であんな仕事をしていたこと、暴力団まがいの連中を顎で使っていたこと、麻薬に手が届くような立場にいたこと。全部彼女自身の責任だよ。どの程度情状を酌量してもらえるか、取り調べに対する彼女の態度次第だ。ノビ太と俺が面会した結果彼女の態度を変えさせた。それだけでも十分意義があったと言うべきだ。今はこれ以上手も口も出せない。君もその辺をはっきりわきまえておけよ」

さすが現職の警察官、剛の言葉は証太の胸に響くものだった。

証太はすぐに示談書を書いて警察署へ持って行ったが「弁護士に渡してくれ」と言って受け取ってくれなかった。

川中県議の家へ行くと新聞記者らしい人が数人いてすぐに取り囲まれた。かき分けて玄関に着くと、きっちりとスーツを着た、川中組とは違う人がいたので、

「一志証太です」と名乗ると目を見張って、

「ご用件は」と丁寧に尋ねる。

「示談書を書いて来ました。私にも落ち度があることが分かりましたので」

証太の言葉にますます不審げに首をかしげながらも、証太を玄関に待たせて中へ入った。

　ポスターの写真で見たことがあって一目で川中県議と分かる人が現れて、「このたびは娘が…」と平身低頭する川中氏に、

「私にも落ち度がありました。それで示談書を書いて来ました。弁護士さんに相談して文言に訂正すべき所があれば直してもらって署名捺印します」川中氏は驚きを隠せない様子だった。

証太はすぐに応接間に通された。弁護士が呼ばれて、示談書を難しい法律用語で書き直されて署名捺印した。

その示談書と別に、

「釈放されたならば、私がしている仕事の手伝いをお願いします。これは示談の条件ではありません。お願いです。念のため。一志証太」と書かれた紙が添えてあった。

不審に思った川中氏が

「るいにさせたいあなたのお仕事の手伝いとは、どういう事ですか」と聞く。

「私の生家のある村では、夫婦揃っていても、もう家事ができない人、一人になってしまった人もいます。そういう人たちを村の外の、知らない人ばかりの老人ホームへ入れるよりも、村の中で二軒の家に集めて、まだ元気な老人とヘルパーさんが面倒を見ています。

　テレビの前に座っている人をよく見ると、ただそこにいるだけで、画面を見ていないのです。先日気が付いて唱歌のＤＶＤを買って持って行きました。繰り返しかけていますが、今のところは大変喜んでいるようです。

　るいさんには、読み聞かせをしてもらいたいのです。表現力は抜群ですし。機械の映像ではなく、生きた人に声をかけてもらいたいのです。強制するつもりはありませんし、都合のつく時だけでもいいですから」という証太の説明に川中氏は、

「いやいや、是非やらせてもらいたいものです。やる気になってもらいたいものです」と言いながら涙を流した。

　麻薬使用、逮捕監禁罪、など無罪にはできなかったが、証太や友人たちの嘆願書なども出ていたので、執行猶予の付いた懲役刑を言い渡された。

　証太の父母が住んでいる村はこの町から一〇キロほど谷間を遡った所で、父一志義明は村役場の職員として山林の管理を担当している。

村が限界集落といわれるようになってしまって、本来の仕事よりも、老人の手に余る排水溝のどぶさらいや、伸びすぎた庭木の刈り込み、屋根の修理など、老人の家屋敷の管理までしなければならなかった。

そればかりか、葬式をしなければならないのに、親族が遠いので手続きや段取りを代行しなければならなかったりで、本来の仕事がおろそかになっている。

五十代半ばで退職した人が戻って来たり、まだ元気な六十前後の人が林業を希望して来たりして、椎茸や椎茸のホダ木を道の駅に卸したり、細々と林業も続いている。

村の中でも山の奥で、証太の生家のある所よりもさらに奥深くにあった集落の人たちは、家を残したまま子供の所へ行ってしまった。残った家は藤蔓に巻きつかれて縛り上げられたようなっている。中には基礎が崩れてしまって、ひしゃげたまま宙吊りになった家もある。

この辺では小さな墓が目につく。廃屋の辺りに石塔がある。家の数だけ墓があるようだ。

比較的新しい小さめな石塔ばかりである。昔は土饅頭に木の墓標だけだったのだろう。金のかかる石塔は、昭和の建設ブームのころ出稼ぎで得た金で作ったものに違いない。それほど貧しい集落だったのである。

『鬼哭啾々』、証太はいつもここへ来る度にこの言葉を思い浮かべる。ここに住み着いた人はどんな人だったのだろう。整地した屋敷跡以外に平らな所は全く見えない。

　世間をはばかる人だったのだろうか。まさか、隠れキリシタンでもなかろう。

受け継ぐべき農地のなかった人たちが、木を切り、薪や炭にして売り「口に糊する」だけの生活をしていたのかもしれない。

　それにしても、昭和の経済成長期にここの人たちのしたことは、出稼ぎの金で小綺麗な墓石を立て、その次は子供を町へ出して就職させ、家を持たせ、自分たちもそこへ転居することだったのである。

転居した先も不景気だ。工場やスーパーで引き揚げてしまった所が多い。そこで働いていた人たちはどこへ行ってしまったのだろうか。

　五十世帯くらいあったという集落に、一人も住む人がいない。ここへ初めて来たときは、こんなに山奥だから仕方ないのかと思っていた。証太の生家のある集落も三十戸くらいの内、人が住んでいるのは半分、それも老人ばかりである。老人が死ぬ度に人が減り、新しい命が生まれることはない。

　証太は原油価格が高騰した一昨年、木質ペレットを生産してビニールハウスに使い、外に払う金を村の中に還流させれば村が潤うと考えたのだが、原油価格は急落してしまった。

　イチゴ栽培は、設備費、技術など一朝一夕にはできないし。椎茸栽培、山菜採りくらいで生計を立てるのは楽ではない。村では税金の取りようがないので、地方交付税交付金だけが頼りである。

役場の職員が「予算案の作成ができない」とぼやく。

農業も林業も人あっての事である。証太はこの藤蔓に巻き込まれてしまった家々を見ているうちに「どう足搔いても老人の死と共に息絶えていく村の運命を変えようと、足掻くことの虚しさ」を思うようになった。

村では集落ごとに、比較的便利な場所にある家を選んで手入れをし、話し仲間、遊び仲間を集め、夏の内に準備して、ばらばらに暮らしている人たちに一緒にいることに慣れてもらって、冬には一緒に暮らしてもらい声掛けの手間を省くということも勧めている。

山際の耕作放棄した元農地には、掘り残しのジャガイモがところどころに繁殖している。藪の中にホオズキ（酸漿）が固まって繁殖していたり、長芋の蔓が伸びた桑の木いっぱいに絡んでいる。

桑の木は幹が二〇センチを超えるくらい太くなって、未熟な緑の実、紫色に熟した実が鈴なりになっている。熟した桑の実はアントシアニン含有量がブルーベリーの約三倍といわれる。朽ちさせるのは実にもったいない。

どこの畑にもホオズキが生えているのは、昔下肥を施したからである。ホオズキを揉み軟らかくして種をほじくり出したり吸い出したりして、口の中で鳴らして遊んだ子たちの、消化できなかった種が下肥に交じっていたのである。

証太はホオズキを一抱え採って帰り道、人のいる家に二本づつ配りながら坂道を下る。役に立つわけでもないホオズキをこれほど、と思うほどみんなが喜んでくれる。

いや、ホオズキも案外役に立つのかもしれない。

老人の死因で多い病気に、誤嚥性肺炎と言うのがある。ホオズキを鳴らすには口の中を巧みに動かさなければならないので、誤嚥の防止に役立つのではないか。帰ったら早速医師に聞いてみて、村で流行らせよう。

音量を測ることも難しくないから、コンクールもできる。証太は思いつきにわくわくした。

この［わくわく］こそ証太の行動の原動力である。

下り切って街道に出た所に道の駅がある。色も大きさも形も見事なホオズキだったので、一本一〇〇円の値札を付けた。

道の駅の職員に頼んで「来週土曜日と日曜日、二日続けて、この先の峠に近い廃村に、梅、ホオズキ、グミ（茱）、スグリ（酸塊）、桑の実などを採りに行きます。同行ご希望の方は車に相乗りして行きましょう。午前八時に出発します。弁当、鎌、ゴム引き手袋をご持参ください」という張り紙をしてもらった。

十五人ばかりの応募があった。ほとんどがこの地の出身者だったので先導するまでもない。

盂蘭盆の前にお墓をきれいにしておきたいという人が多かったのだ。

その村に着くとまず墓の周りの草を取り、線香を上げる人もいる。半分以上の時間を墓掃除と墓へ行く道端の草取りで過ごし、その後まず梅を収穫し、ホオズキなどのほかに、山菜を採る人もいる。

ジャガイモを掘って車に運ぶ人、桑の枝を引き寄せて実を採る人、スグリや、グミをとる人、大人も子供も皆夢中である。

夢中で働いた人たちには陽が落ちるのが早かった。

山の陰に落ちてゆく夕陽を見ながら涙ぐむ人もいた。

盂蘭盆までにあと三週間ある。それまでにはかなり綺麗になっているはずだ。

盂蘭盆には自分の住んでいた跡を、今生の見納めと思って来る老人が毎年いるので、今回の企画は証太が思いついたことであった。

廃村ツアーの一行は、帰り道の途中に老人たちの集まっている家に寄って、収穫物を分けたり、お茶を飲みながら旧交を温める。

「有料老人ホームを見て歩いているのだが、できればここに入りたい」と一人が言い出すと「私も」と二人手を上げる。「母を頼みたい」と言う人もいる。

「世話をしなければならない人ばかりでも困るぞ」と地元の人が心配すると、

「娘が付いてくる。息子も定年近いから、来年あたりは来られる」と言う。

「村長に話してみましょう。ちょっと手を入れれば住める家がたくさんありますから」と証太は約束した。

　思いがけず村民が増えることになりそうだ。

道の駅で解散。参加料は無料でも自分の収穫だけで日当にはなったのだが、参加者が勝手に帽子を回して礼金を集めて、一人千円くらいずつ出してくれた。

村では、介護の必要な年寄りばかり増えるのは困るが、定年後の六〇代の人が来てくれるのはありがたい。

空家について村では、早くから相続人と契約して、利用と管理について、相続人が利用する時以外は大幅に任されていた。

近所の住人に依頼して、天気のいい日に風を通していた。屋根と雨樋、伸びすぎた庭木など、外からできることについては早めに手を入れているので、内装だけできればすぐにでも住める。

村長が村会に図ると「農家では、売り物にはならなくても、自分たちで食べる野菜ならばいつでも供給できる。年金の入る人たちが来てくれるのはありがたい。歓迎する」という結論が出た。

次の週、土曜日と日曜日には、二十人を超える参加者があった。

美津子と、るいが手伝いに来た。二人は証太から話を聞いていたので、桑の実採りに懸命である。「高枝切りの鋏」を使って枝ごと切り取って、実を集める。

桑の木は枝を切っても、来年には新しい枝がのびて実が生る。幹を根元から切っても彦生えがたくさん出ていてそれが伸びる。

美津子と、るいは昼前に笊にいっぱい桑の実を採って老人たちの家へ行った。

土用日に参加した人たちは、美津子とるいが作った桑の実ジャムに舌鼓を打った。日曜日にはスグリジャムもできていた。

日曜日、皆がおしゃべりに夢中になっていたが、

「とざい、とーざい。ただ今より『川中るい』さんによる紙芝居の始まり始まり―」頃合いを見て美津子が口上を述べると、皆が注目する。

舞台をった木枠の中には綺麗な水彩画があって中に照明まで付いている。ざわめきは止んで期待の視線が集まる。

るいの演じる紙芝居「青い鳥」は大変な名調子だった。人々の目は小さな舞台に釘付けになった。

紙芝居が終わっても年配者は、方言で遠慮なしに語り合えるこの席を去り難く、そこで雑魚寝をした人もいた。

窮屈そうだと近所の家に招待された人もいて、あちこちの家で久しぶりの賑わいを楽しみ、遅くまで灯が消えなかった。

前回の催しで「ここの老人ホームに受け入れてもらえるかもしれない」という話を聞いて期待してきた人たちは一層熱心に入所させてほしいと訴える。

正式に「有料老人ホーム」にしなければ村として責任が持てない。「有料老人ホーム」として認可を得るにはクリアしなければならないことが多い。予算の組みようもない「村」では頭を抱えた。

「当座は友人、親戚に逗留する」ということにして、希望者から基金を募ることになった。

　証太は、家々の台所に消火用の水を入れたバケツと、砂を入れたバケツ、消火器などを用意した。

　消防団員は当番で巡回することになった。巡廻も都会のそれとは違う。家に入り台所、風呂など、火を使う所までの巡廻である。元々鍵をかける習慣がなかったから、当たり前にそれができたのである。

　盂蘭盆の日、証太、美津子、るいの三人が小型のトラックに相乗りして、老人たちの家へ行った。

　老人たちの家の庭には大勢の人たちが集まり、庭に続いた畑にまで溢れ、野菜を採り入れてブルーシートを敷き更に蓆を敷いて、バーベキューの用意をしていた。

墓参りに来る人の接待である。夜まで飲み食いしながら、民謡を唄い、盆踊りを踊るのである。泊まりたい人もいるだろうと、その用意もしてた。

「賑やかですね」証太が声をかけると村長が、

「一志君。ちょっと来てくれ」と呼ぶ。

話を聞いてみると、前回までに来た人たちの「志」と言って、おいて行った金が思いがけない金額だという。

「管理しているとはいえ古い家が多いから、多額な出費になる時がありそうです。その金は村でしっかり管理して下さい」と証太、

「君が企画、実施したことだから、君の考えで何かしてみたらどうか。君の自由に使っていい金だよ」と村長、

「僕が使ったら、自分の欲でこの人たちを利用したことになる。何かするならその度に採算を考えます」

と証太、

「バカなことを、君が自分の欲で人を利用する男か」

聞いていたるいが、

「証太。そのお金ポッポへ入れたら、ミッコが結婚してやらないと」

「バカな！」こめかみに青筋立てた証太を皆が面白そうに見ている。

　美津子とるいは群れを離れて老人たちの家へ。

「こんなに皆に愛されて、幸せな奴はどこまでも幸せなんだ」るいは両手を高く上げて

「子供の頃こうして両親と三人手をつないで、毎週、日曜ごとに教会へ。あの子がどれほど羨ましかったか……。何回すれ違ったかしれないのに、覚えていないのね」

美津子は、るいが呟くのを聞いた。

　二〇四〇年時点で人口が一万人を切る自治体が五二三自治体にのぼると試算していて、具体的な自治体名を掲載した記事が 雑誌『中央公論』の六月号に載った。

　自治体が消滅しても村は消滅しない。そこに住む人が諦めない限り消滅しはしない。明治時代にできた行政機構以前の村に還るだけだ。

（完）